

## 寄稿：情報革命と人間

現在“情報”という言葉は至る所に氾濫している。日本でこの言葉が日常的に使われ始めたのは1980年代であるが、アメリカでは既に情報技術を指向した研究所が1950年代に始まっていた。

私は1950年代後半アメリカに滞在し、大学院在学中に関係し、修了後就職したのが民間会社の情報技術研究所で、日本人として最も古くから情報に関わってきた一人ではないかと思っており、かつ情報について長く考えさせられてきた。情報時代、情報技術など情報と名のつくところに往々にしてコンピュータがでてくる。情報即ちコンピュータと錯覚しそうである。しかしなぜ現代は情報なのかを深刻に問うと、その答は簡単ではない。



人間は原始時代から二つの発明をきっかけに文明社会に移行した。一つは火というエネルギーを使うことの発明であり、もう一つは情報伝達や保存の文字の発明である。前者からエネルギー関連の科学や利用技術が発展し、近代の科学技術が生まれた。その結果、人間の肉體労働がエネルギー利用の機械に置き換えられてきた。一方、もう一つの発明である文字には、今まで科学技術のメスがほとんど入ったことがなかった。エネルギー利用の機械化は格段の進歩をとげたが、言葉や文字などの情報の機械化は遅れた。しかし、現代社会は大量の情報を生み出し、かつ情報の取得・処理・伝達・適用のすべての機械化を要求している。

機械化は、人類が文明社会に移行するにあたって発明したエネルギーと情報の機械化があって初めて完成する。即ち現代科学技術の本質は、情報の機械化を求める“情報革命”にある。近代までの科学技術は、すべて人間のためにあった。しかし、情報革命は、ロボットに見られるように、人間の存在自体を問題にしはじめ、真に人間と科学技術のあり方が問われつつある。

本財団の目的は「エレクトロニクス及び情報工学の分野で、人間と機械の調和の促進のための助成」にあり、まさに情報革命における人間と機械化のあり方を真摯に追求しようとするもので、これは現代の科学技術が問われている問題でもある。

評議員 朝倉利光  
(北海道大学電子科学研究所長)